

Fate/Crusade Ops 【軍
人Fate】

はまっち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖杯戦争。

万能の願望機を賭けて幾柱もの英雄を『従者』サーヴァントとし、以てその望みを叶えんとする魔術師達の抗争――

様々な想念と共に満たされるは、かつて回天を願い模造された『五年式八二号防空陣地』

かくて、戦争は始まるべくして始まる。

――近現代の英霊のみが呼ばれるようになってしまった、異色の『聖杯戦争』が

目次

I n c o m i n g	3	U n d e r	2	U n d e r	1	U n d e r	I n c o m i n g	H o l d	S t a y	O p e n	O p e n
		h e a v y		h e a v y		h e a v y		f i r e	a l e r t	F i r e	F i r e
		f i r e		f i r e		f i r e				0 2	0 1
46	40	0	35	0	29	0	24	16	11	5	1

Open Fire—01

ざり。黄土色の細かな砂が、革製の半長靴に踏みしめられる。一定の周期を持ってゆつたりと、しかしリズムカルに鳴く小石と砂の群れは、静謐な洞窟の中で消えていった。

「……しかし、まさか駐屯地の地下にこんな空間があつたなんて」

ざり。黒い闇が一言、ポツリとこぼす。若い戸惑いを抱えた男の声に、先導する老年の男は、皺だらけの声帯からしゃがれきつたかすれ声をもって答える。

「この駐屯地のなかでも知る人は、少ない。あの魔術協会ですら近年、この地下壕を発見したのだから」

じやりつ。先に行く老人が、その濃紺色の礼服を揺らして立ち止まった。その肩には金糸で編まれた3つの桜に三本の棒。いやにぴんと伸びた背中に、これまで培ってきた歴史の重みと経験の豊富さを感じさせる。

「——ここが、この春野駐屯地一番の霊地だ」

老人が立ち止まったのは、土と砂で築かれた小部屋だった。老人の持つカンテラから漏れた橙色の光が、どこか怪しい輝きになってその小部屋を照らし出した。

壁一面にといわず、床以外の全てに描かれた赤い幾何学的な紋様が、血液を活発に送り出し続ける心臓のようにどくりどくりと脈動する。

そんな異様な空間で老人は、いかにも普通のことであるように口を開いた。

「触媒は」

「……はい。きちんと、(うん)に」

呆然としたように我を喪っていた一瞬の空隙から立ち直った男は、老人に掛けられた言葉に応じて背負っていたドットの細かい迷彩柄の背嚢を壕の砂地に下ろした。

沖繩かそこら辺の地下司令部壕に似ているな。心の中で呟いて、背嚢から輸血用の血液パックやペンキ塗りの筆を取り出す。

そして彼はおもむろに砂の地面に膝をつき、血液をしたたらせた筆を取った。

ざりり。粘性を持った液体が砂と刷毛の間に浸透する。巻き込まれた砂と砂とが、耳に障る嫌な音を立てて鳴いた。

大きな円を描き終わると、その周囲に文字と文字の羅列を。黒魔術の一つと言われても疑うべくもないほどの緻密さで、その魔方陣を描いていく。

俗に戦闘服と呼ばれる迷彩柄の被服が砂で汚れるのもかまわないのだろうか。男はただ一心に陣を描き続けた。

「猪又二曹」

「はい」

幾分か経った後、唐突に名を呼ばれた若い男が、自衛隊特有の張りのある返答を返す。老人は冷ややかな、なにも写していないような瞳を二曹に向けると、皺だらけの唇を開いた。

「今回君が召還するものには、”狂化”を付与せよ」

「……狂化、でありますか。一等陸佐殿」

そうだ。一佐の命令に、二曹は幾何学模様——陣を描いていた手を止めて彼を睨み付ける。

狂化。必然的に『バーサーカー狂戦士』の英霊を喚ぶためだけの呪文。そのデメリットが分かっても上位に位置する階級だと証明する階級章を目にして、猪又二曹はぐつと呑み込んだ。「この聖杯戦争において、バーサーカーの英霊を喚ぶ。魔術刻印の少ない君にとって、それが最も戦力になるだろう」

それに、この英霊はまさに狂戦士だからな。一佐は足下におかれた背囊に手をつつこみ、その中から古い和紙で包まれた二つの包みを取り上げると、痙攣する唇の筋肉を抑えながらにやりと微笑んだ。

「ほら、君が喚ぶ英霊だ」

受け取り給え。老人は白い手袋を外すと、真つ黒い入れ墨だらけの右手で一つの包みを手に取り、丁度魔方阵を描きおえた猪又二曹に手渡す。

包みを手に取った瞬間、猪又二曹の肉体。左の肩に描かれた小さな入れ墨——魔術刻印がじくりと痛む。

一佐の右腕に描かれた魔術刻印に比べて何倍も小さなその権能が、猪又二曹の立場の弱さを如実に現しているような気がした。

「……それでは」

悔しさに唇を噛み締めて、古い和紙で丁重に包まれた小包みをとく。

ぱさり、かざりと紙同士が擦れ合う音が地下室の中に響き、直ぐに消えてなくなった。

「どうだ、猪又二曹」

どこか得意げな一佐に、全ての和紙を剥がし終わったその手の中に残ったものを唾然とした表情で凝視する二曹。

その手に乗った掌よりも少し大きなサイズの銃剣を確認し、瞬きを数度。

——なるほど。静かに頷いた彼は、つい先ほど完成したばかりの血染めの魔方阵の中心に一振りの銃剣を安置すると、現代に残された『奇蹟』を実行するべく息を大きく吸い、告げた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

Open Fire—02

女は気がつくと、ガラクタの中にいた。

ねっとりとした蜜の中にいるような脳みその中で分かったのは、ガラクタの山に押しつぶされていると言うよりは、ガラクタの海にたゆたっている感覚。

女はおもむろに、右腕を動かすよう脳髓を通して神経に命じる。

しかし遅々として電流が流れていかないのが、嫌に克明なヴィジョンをもって気付かせてしまった。

その鉛を付けたように重い右腕はゆったりと泥をかき分け、丁度顔のまえを漂っていた空き缶を明後日の方向にはじき飛ばすと止まる。

——なるほど。どんな状態なのか、目を開かずとも分かった。

黒い泥の中にふよふよと浮いているような、異様な感覚。右を見ずともそこに壊れた三輪車が上下していることを悟り、左をみずとも山積みの椅子が転がっていることが、なんとなく察することが出来た。

——ああ、夢か

女は、はあ。と大きいため息をつく。こんな事が起こるのは、明晰夢しかあり得ない。

そうと分かれれば、慣れたものだ。静かに呼吸を落ち着け、女はイメージを膨らませる。身体の中に巣くう虫を、思い切り捻り殺してやるイメージ。自分が三戸になって、身体の外へ外へと抜け出そうとするイメージ。ハリガネムシがカマキリの腹を食い破つて水へと逃れるイメージ……寄生虫に関連したイメージしか湧かないのが乙女心に突き刺さるが、そのおかげか魔術回路が開くのが早まった。気がした。

じんわりと脚が痺れていくような、壊死していた組織に久しぶりに血流が流れ始めたような違和感。言うならば血液を、久方ぶりに魔術回路という器官に流すのだ。これぐらいの鈍痛は想定の中である。

魔力が体中に行き渡り、女はその文言を口に出す。

—— Ex p e r g i s c i m i n i

「Ex p e r g i s c i m i n i」

とても聞き慣れた誰かの声を継起に、女は、エイナ・ヴァイナモ・ロムはバネ仕掛けの人形よりも早く、上体を引き起こした。

背中はぐっしりと汗で塗れ、胸は荒く上下する。典型的な悪夢のあと。だ。

「……………久しぶりね。あんな夢見るなんて」

ぱさりと髪をかき分けると、星のような銀色が視界の端をぱらぱらと舞う。

祖国、フィンランドの雪原よりも白い髪の毛は、この極東の小さな街で行われる聖杯戦争に邪魔なものだと知っていても、これを切る気にはならなかった。

うーんと背伸びをしてベッドから飛び降りると、顔を洗うよりも先に冷蔵庫へ。

近くにあった銀色のスプーンを手にとって、その蓋を開けた。

「……さて、どれをのもうかな」

冷蔵庫の一面に敷き詰められた市販のヨーグルト。その傍らには栄養剤。一種の狂気すら感じるほどに、一つの商標マークが微笑みを返してくる。

私の魔術はこれがないと始まらない気がするのよね。小さく独りごちて、手頃な栄養剤とヨーグルトを引っ掴み、スプーンでもって即座に胃の中へと流し込んでいった。

「……よし。『この子』にも頑張って貰わなくちゃね」

エイナはそつと下腹部を、入れ墨のように黒く彫られた文様を優しくなで回すようにさすり、ぱんつと大きく音を立てて自らの頬を引っばいた。

そうして、ふう。心を落ち着けて、これまで踏み荒らしてきた床に目を落とす。

「……………儀式の途中で眠くなっちゃうなんて、私の悪い癖ね」

そこには、黒く変色した血液で描かれた魔方陣が広がっていた。

その中央に鎮座する一発の変形した銃弾を手にとると、エイナはこれを今まで保管してきた祖父。かつては軍医だったらしい彼に敬意と、その先見の明に対する感謝を表明

しないといけない。

「狙うは『暗殺者』……確かに、私好みの戦歴ね」

この日のために、遠い極東で行われる聖杯戦争のためになんども復習した英霊の経歴を、脳内ではばらばらと捲る。

百人に聞いて、何人が最強の英雄だと答えるだろうか。それほどの実力を持つ英雄を、エイナは呼べる。

だから、聖杯を手に入れるためには容赦なんてしない。彼女はそう誓い、右の手の甲に宿った三画の入れ墨、『令呪』を上げ上げと眺めると銃弾を元の場所に安置した。

——すう。大きく息を吸い込んで、魔術回路を励起させる。

寄生虫が身体から這い出してくるような、吐き気を催す想像と共に魔力が体中を循環していくのが分かった

「——素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師マキリ・ゾオルケン。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
ぐりと、腸がねじれたような激痛が襲う。刻印が暴れ出したのか。悲鳴を噛み殺し、

痛みに耐えてエイナは詠唱を続ける。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

途端、じくりとヘソのあたりがうずいた気がした。

「――告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

血で描かれた魔法陣をなぞるようにして、赤黒い光が漏れ出る。勢いよく放出される魔力によつて銀色の髪がはためき、これを大きく散らした。

「……誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

ひとときわ大きく、刻印がのたうち回る。唐突な刺激に彼女は目を見開き、舌を突き出して声にならない悲鳴を上げる。

げぼりとどす黒く濁った血を吐く。煌々と輝いていた赤黒い魔方陣が、どこかへと消えていくように薄くなつていく。

まだいける。エイナは力を振り絞り、最後の一説を唱え上げた。

「……………汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

荒れ狂う嵐のような魔力の大風と光の中で、血を吐くような、まるで悲痛さを感じるほどの絶叫が部屋の中に拡散して、塗りたくられていく。

不意に、光と風の存在が消え去った。今さっきまでの現象全てが嘘のように、部屋の中が静まり返る。

「……………やつ、た？」

エイナはおそるおそる、目を開いた。目の前にいるであろう存在は、正真正銘の英雄である。その確信が、なぜか胸の中で高鳴った。

「問おう」

目の前の魔方陣の中央に直立した白い人影が、醜く歪みきった顎を開く。氷のように冷たく、地を這ってくるようなバリトンの声色にも怯まず、エイナは毅然として男の装いを観察した。

そこ全貌はフードに隠れて見えにくいのが、おそらく彫りの深い西洋系の顔に、短い髪。そして、特徴的な醜く歪みきった下顎。

服装で言うと、白だった。白づくめのポンチョ。雪のような白の軍服。その背中に背負われた小銃だけが色を主張しているようだ。

女性に凝視されていることに気がついた男は、どこまでも不敵な笑みと共に尋ねる。
「貴様が俺の上官か？」

S t a y a l e r t

がさり。生い茂る藪を踏み分け、金髪の少女は竹林へと足を踏み入れる。

墨で塗りたくったような黒の詰襟が、とてつもなく邪魔くさく感じた。

そこは春野市の北の端。三方を山に囲まれた春野市市街地において、芝刈りの老人くらしいか近寄らない。

ある意味現代に残された秘境であつた。

あるのかないのかわからないような獣道を辿り、しげりに茂つた竹の群を躲して奥へと進む。

途中少女はふうと一息ついてちようどよい笹の陰に立ち止まると、周囲の叢林を一瞥した。

煩雑に様々な雑草が野放しに生い茂っているように見えて、その実は整然と手入れされていゝる。侵入者を迷わせるような構造を人工的に作り出しているような、違和感。自然にできた竹林にしては、どこか意図というものを推し量れてしまうその林をただ眺め、どうしようもないわねといったふうに諸手を挙げた。

「こんな未開の地に住みたがるなんて、東洋人は変なことを考えるわね」

小さくため息をついて再び歩き出した途端、笹の葉と葉の間からこぼれた木漏れ日が、彼女の漆黒の装束に当たって消えていく。ざわざわと笹同士がこすれて鳴り喚く音に微弱ながら魔力のようなものを感じ取り、少女はちつと舌打ちした。

どこかで結界にひっかかったか。

自然を使つた結界魔術に心得はないが、風水だか陰陽術だかといういまだに体系化されてさえない極東の魔術に似た魔力の流れを感じる。そう結論付けた少女は、楽しみに唇をゆがめた。

「まあ、そうこなくちゃね。腐つても魔術師の工房なんだから」

竹と竹の間から、決して大きくはないサイズの茅葺屋根がちらりとその姿を覗かせる。

そこそががこの竹林の最奥部であるだろうことは、何よりも容易に想像がついた。一歩足を踏み出し、そのブーツでぐじゆりと雑草を踏みにじる。

また一歩。今度は砂利を足蹴に。さらに一歩。落ちた笹を蹴りつける。

一歩一歩と目指す茅葺の屋根が見えてくるにしたがつて、少女にはそれが庵であることが分かった。

庵の縁側には老年の男が一人。静かに座禅を組んで座っている。周囲に敵の影はななく、警戒するような素振りもない。

「お邪魔するわ」

「——何をしに来た。こんな山奥まで」

何重にも張り巡らせた結界を越えてやってくるとは、ただの迷子というわけではないだろう。老人は酷い火傷の痕が残る右手に浮き出た三画の文様、令呪を左手で隠しながら平静を装って目の前の少女を見据える。

彼女はふつと笑うと、整った愁眉を柔らかく曲げて口を開いた。

「私はアデイ、魔術師よ。ねえ李老師、今日はあなたに——」

「……………ランサー」

アデイと名乗ったの言葉尻をふさぐように、男は、李は静かに右手の令呪を掲げる。流れるように李の名前を呼んだ彼女に、一切の心も許してはいけない。そう誓う。

その瞬間、ふつと空気がゆらめいて、青々と育った太い竹の杭が——竹槍がどんとアデイと李の間に割って入った。

「そんな小娘、同志に何の用か」

円錐形の編笠を被った農民。といった風体であろうか、どこかオリエンタリズムあふれる背格好の男、ランサーが、無防備そうに見える少女、アデイをねめつける。復讐と憎悪に歪んだその瞳に、何も映ってはいないように見えた。

おお怖い怖い。アデイは諸手を掲げてお手上げだといった形に笑い、おどけて見せ

る。『人間』と『救国の英雄』、まともに戦闘になるとすると、ひとたまりもなく捻り殺されてしまうだろう。

いわんや、最強の白兵戦能力を持つ『槍兵』のサーヴァントならば。

「まあ、そんなことよりね李老師。今日はあなたに——降伏勧告を伝えに来たの」
「降伏、だど？」

緊張が途端に張り詰め、いやな沈黙が庵に降りる。

李の、そしてランサーの殺意すら隠った視線がアデイを射抜く。余裕綽々と言った体で胸をそらし、お返しとばかりに鼻で笑つてやる。

静かな挑発に、ざわりと音を立てて笹がうめく。ランサーから瞬間的に放出された濃密な魔力が風となつて、三者の間を渦巻いた。

アデイは堪えきれなくなったかのようにふつと顔をほころばすと、ひし形を装飾した様な文様の令呪を手の甲にちらつかせながら呆れた声で告げる。

「ええ。一つを除いて、貴方に勝機はないわ。諦めることね」

「——戯言を！」

瞬間、ランサーは吠えた。喉の奥から激怒の咆哮を絞り出して、手にした竹槍に指を這わせる。足の指にバネを閉じ込め、おもいきり少女に飛び掛かった。

雷よりも早く、正確に。

突き出された竹の槍はまっすぐにアディへと迫り——虚空において唐突に止められた。

「……っ、サーヴァントか」

よくやったわ、ライダー。苦々しくぼつりと口からこぼした李にかまうことなく、アディはそつと竹槍の穂先を、その場には何も無いはずの虚空を撫でる。

その刹那、虚空から圧倒的な魔力が吹きだし、竹林中の笹を鳴らすほどに吹きすさぶそれは風となつて、黄金色の髪を揺らした。

それじゃあ、もう一度言おうかしら。

少女は、『騎兵』^{ライダー}のマスターは老人を向き直ると、口角を薄く広げて笑う。まるでどこかの扇動者のように、大仰なしぐさで腕を広げながら。

「私はアドルフアスフィール・フォン・アインツベルン。この戦争に勝ちたければ、私の軍門に下りなさい」

——私は、〃最強の〃英霊を保持しているのだから

H o l d f i r e

——失敗した。

夜の町並みに、荒く間隔の短い呼吸が吸い込まれていく。

片やゴム底のスニーカーがアスファルトを跳ねる音。片や軍靴のせわしなく舗装された道路を叩き続ける音。二つの音の群れはただひたすらに、その足を止めようとはしない。

雑踏と暗闇とを行ったりきたりしながら、できる限り直線の道路を避けるようにして逃亡を続けていた。

「畜生。なんでこんなことに！」

『時計塔』現代魔術科の魔術師、ヴェスパ・マンククラムは、痛いほどに渴ききつた喉を潤らして叫んだ。

その属性は火。起源は感応。魔術刻印はせいぜいが数えるほどしかなく、代を重ねるほどに強く、重くなっていく魔術師の界限のなかでは弱小という他なかった。

しかもヨーロッパのペン^{半島生まれの貴族ども}ンスラールならまだしも、彼の出身はフィリピン。ミンダナ才島の片田舎。混血が進んでいるとはいえ、400年前の先祖は立派なクリオリ^{植民地主}オーリヨで

あつたこと。それだけが彼の幸運であつた。

そうでなければ今現在、このように命からがら逃げ続けていない。

彼の時計塔での生活は、そりやあもう、悲惨だつた。

魔導書の閲覧許可が出ないのは当たり前。鉱物科の同年代の奴らが自慢げに高価な貴金属を用いた魔術を使い、天体の後輩どもは惜しげもなく占星の力を行使していく。おなじ肥だめのクズどもだと思つていた現代魔術科の学生でさえ、『長子』と『開位』の群ればかり。しかしヴェスパは、必死に自己を研鑽し続けた。

未開の原生林から己の身一つ努力一つのみで都市を開墾した、偉大なる先祖を夢に見ながら。

そんななか、現代魔術科の学部長、ドクター・ハートレスの失踪と共にすげかわつたのは、いかにも魔術師ですよといった風な風体の若い男。

——ロード・エルメロイ2世

ヴェスパは最終的に、彼と、彼に教えを請うた数多くの天才達を嫌つた。

はるばるダバオからロンドンくんだりまで繰り出してきたというのに、ここもまた才能で決まる世界か。とうの昔に解つていた、気付いていたことだが、その再確認はヴェスパ・マンクラームの19年にわたる人生において再起不能なまでの傷を負わせるに充分すぎるものだつた。

「くそつたれ、どこまで追いかけてきやがるんだ……っ！　そう言うのは情熱的なコルデイリエーラの乙女達にして欲しいもんだよ！」

少年の後方から爆音がとどろく。轟音を上げて爆走する軽自動車の姿をちらりと見て、ヴェスパは大通りを避けて路地へ。歓楽街特有の人ゴミから、客引きの女どもの間をすり抜けて更に先へ。どことなくフィリピン系の顔立ちがいくらか見えた気がしたが、看過することなく走りすぎていく。

聖杯戦争なる儀式の存在を知り、一縷の望みを掛けて日本へ飛んで、ここ。春野市に飯の住まいを構えた。春野市随一の歓楽街である小倉通りの、小さな小さなカプセルホテル。まあ慣れない準備に手間取ったとはいえ、さすがは先進国。百貨店に行けばなんだったであろうという、マニラの都市部でもそうない環境下に驚き、手早く準備を進めていった。

そして首尾良く浮かび上がってきた令呪に喜び勇んで、鼻歌交じりのままに召喚の儀を行ったのがつい昨日の話。

問題は——何故か、こうなってしまった。何故にか、しくじってしまった。と言うことか。

ヴェスパは私財を投じて一枚の手紙を入手し、これを使って戦史に残る名将を召喚しようとした。狙うクラスは『魔術師』キヤスター

キャスターのサーヴァントはその名の通り、陣地の作成と魔道具の生成に特化したサーヴァント。かつての事例では、その名の通りの魔術師の他にも科学者や哲学者、派手な小説家ですらも該当するのだという。

陣地の作成に特化する。

それはつまり、防衛戦と籠城のスペシャリストにして、持久戦闘のプロフェッショナル。最も老獪にして安定した作戦指揮を取る英雄が召喚されるべきであるだろう。

英語とタガログ語以外読めないヴェスパが手紙に期待することが出来たのは、その書状の差出人と、その発見された場所だけだった。

なんでも持ち主の老人によると、1945年の3月に組織的抵抗を終えた太平洋戦争の激戦地、硫黄島から発見されたのだとか。お得意のバンザイ・チャージの結果生まれた日本軍の高官らしき遺体の懐に入っていたものなのだそうなの。

——そう考えると呼ばれるであろう名將は、キャスターのサーヴァントはどのような真名なのか、火を見るより明らかであった。その筈なのだ。

「おい……キャスター！ あいつをどうにか出来ないのか！」

「すまん……今の吾輩はどうみても、まごうことなき敗軍の將のそれであるのだ……」

逃げるヴェスパを、霊体化していない大男が追う。どたどたと軍靴の底を地面に打ち

付けながら必死にヴェスパの後に続こうと走っているのはどこか愛嬌のある姿……のようにも見えないことはない。

なんとかぎりぎりの魔力と術式を魔方陣にぶち込むことによつて魔方陣の寿命よりも先に、赤黒く光り輝いていた文字列の隙間から紫色の煙を吐き出しながらも、かろうじてサーヴァントを呼ぶことが出来た。

そうして出てきたサーヴァントが、このキャスターだ。

はあ。とため息をついたヴェスパはちらりと彼を、キャスターを見る。

令呪を得てから、マスターになつてから発現した異常な力。サーヴァントとしてのパラメーター、資質を「視る」ことができるというこの力でもつて——網膜の奥に浮かび上がつてきたキャスターの能力値に目を通す。

「……な？」

「……………ああ。なんだつてこうなつちまつたんだ」

どこか自慢げに確認を取つたキャスターを、ヴェスパはある種の恨めしさも内包した目で睨みつける。

何が悲しくて、全ステータスEのサーヴァントと一緒に逃げているのだろうか。

ため息のひとつでもついてやりたくなつたが、キャスターの後ろから……路地の奥から聞こえてきたエンジンの唸りに現実へと引き戻される。

「……吾輩、なぜか記憶の混濁がみられるのだ………真名もわからず、霊体化もまたできないのである………」

「喋らなくて良いから脚を動かせ、キャスター！」

くそつたれが、立ち止まる間もないのか！ 路地裏で丸まっていた猫がとびあがり、ふしやーと牙を見せつけながら毛を逆立てた。キャスターがなにかにぶつかつたのか、後ろのほうでガラガラと物が倒れる音がする。エンジンのドルドルという唸りがすぐそこまで迫ってきている。様な気がした。

「くそつたれ、ああ本当にくそつたれだ！ 故郷のココヤシが食べたい！」

ぶつぶつと毒づきながら、少年は走つた。

追ってきているのは音から推察するに、『騎兵』^{ライダー}であろう。それか、騎乗スキルを持っている何者かか。

次第に奥まっっていく路地。ちつと舌打ちしたヴェスパは、魔術を行使するべく魔術回路を活性化させた。

「——やるしかないのか」

たった3代だけの歴史がヴェスパに力を与える。魔術を行使すべく、スマホをワイシャツの胸ポケットから取り出す。

「マスター！ 吾輩に指示を出せ！」

「Puwede。やるぞ、キヤスター」

狭い路地。そそりたつ壁に背を向けた二つの人影の前に、白衣を着た男が堂々と歩みを進めてくる。

「……残念だねえ、マスター君。鬼ごっこは終わりだよ………さあ、その活^魂力を戴かせてもらおうか」

にやにやと、弱いものをいたぶるような嗜虐的な笑み。猫背にまるまった背中で白衣をたなびかせて、丸いビン底のメガネをかけた無精髭の男は大仰に右手を広げる。

——キヤスター、気をつけろ。

ヴェスパの網膜には、彼のステータスが見える。大まかに。ではあるが、全部が全部ランクEなんて悲惨な状態ではなかった。

つまり逆説的に言えば——あの白衣の男は、サーヴァント。人知を超えた究極の英雄の一角に坐するものなのである。

キヤスターはこくりとうなづき、軍服の懐から小さな拳銃を引き抜くとそれを正面に構える。アルミ製の小さな、手のひらサイズの拳銃。それがなぜか、やけに手に馴染んだ。

「僕としては、あんまり鹵獲品を使いたくはないんだけどさあ。イワンどもの油は質が悪しい……でも、司令官殿が喧しいんだよ。分かってくれるかね？」

なにしろ燃費がとてつもなく悪いんだ。笑いながら、白衣の男は右足を前へとやった。砂の啼く嫌な音が路地に響き、キャスターの拳銃にまた少し力がこもる。

「おい……お前は『ライダー』か!？」

ああ、違う違う。必死さを滲ませたヴェスパの問いかけに、白衣の男はけろつとした様子で返す。——あんな野蛮人どもと一緒にしないでほしいよね。ふふつと笑んで、男はどこからともなくスパナを取り出し、握り締めた。

「戦争には、いつの時代だって『技術者』^{エンジニア}が必要でしょ？ 僕はそれさ」

Incoming

「——エンジンアとキャスターが交戦した」

「ついに戦端が開かれた。ということですか、一佐殿」

「春野市のはずれ。鋼鉄のフェンスと鉄条網に囲われた巨大な敷地の中で、迷彩服の男は口を開いた。老獪にして理知的な光を相貌にたたえて、老人はこくりと小さく首肯する。

「ああ。やっと戦争らしくなってきた。ということかな」

陸上自衛隊、春野駐屯地。

『国家権力』に守られた「城」の中で老将は、一等陸佐は静かに腕を組む。

簡素を尽くしたような白いペンキ塗りの壁に、いかにも固そうな布団。一佐の前には真つ白なパイプ机が横たわっており、自衛隊という暴力装置の神髄を見せられたような気がした。

無論、簡素とはいえいくつかの私物持ち込みは許可されている。そのため猪又二曹はスマホや現金、多少の娯楽用具などの外にも魔術に使うボルトやナットをこつそりを持ってきている。

だが二曹の常日頃から暮らしている隊舎と同じようならば殺風景極まりないはずの、およそ20畳程度の個室の隅に小さな山が出来上がるほどの私物がいくつかというレベルではない数の私物が持ち込まれている。

誰のものかわからないしやれこうべ、ろうそくと燭台、生贄の爬虫類がぐつたりと横たわったかごなど、まるで黒魔術か何かに使うような魔導具たち——そのすべてがこの老人のものであることを。魔術協会とのコネを生かして取り寄せてものだということ、「駐屯地司令付総務陸曹」 について先日任命された二曹は知っていた。

長机の上に鎮座した燭台が、消灯後の暗闇をほんの少しだけ温かみを湛えたオレンジ色で切り開く。

壁にかかったアナログ時計の長針はほとんどぴつたりと天を指し示しており、それを自覚したとたんに夜闇の深さが増した。ような気がした。

「……これでこの聖杯戦争において、『セイバー 剣士』と『ランサー 槍兵』、『アーチャー 弓兵』が確認できないだけとなりました。丁度三騎士とは、何とも皮肉なものです」

おや。はたと眉をひそめ、一佐は怪訝そうな瞳を二曹に向ける。

「アインツベルンの『ライダー 騎兵』はいいとして……『アサシン 暗殺者』は一体だれが？」

「外来の魔術師によって召喚されたようです。……御三家的に、マキリの一門だと思われます」

この聖杯戦争のベースになったとされる冬木市の聖杯戦争は、令呪が優先的に分配される血筋がいくつかあった。

冬木の大地主で、大きな霊地を提供した『管理^{セクトドクター}者』遠坂家。英霊を聖杯へと呼び寄せ、実体化させる技術を提供したアインツベルン家。そして、英霊を意のままに操る絶対的な繋がり、『令呪』を考案、作成したマキリ家。彼らを『御三家』と呼び、外来のマスターたちからすれば蛇蝎のごとく嫌われ、狙われる存在となる。

本来の聖杯戦争とはこの三つの血族が主賓となつて執り行われる大願成就の儀式のことである。のこりの4騎分のマスターなど、土足で聖杯を奪いに来るところからしても客人ですらない。むしろ盗人なようなものだ。

「……慣例通りならば、召喚されるサーヴァントのクラスに多少の差異さえあれども総じて7騎であるはずだが………」

『それがあり得ないのは、私を呼んだ時にわかっていることだろうか?』

老将の正面で、長机の向こう側で空気が揺らぐ。

慣れないものならばその断片に触れるだけで卒倒してしまいそうなほどの濃密な魔力が、人智を超えた力の奔流が渦巻く。

白い半そでの軍服に礼服を羽織つた独特の着流し。だがしかし、その階級は星がいくつあるともわからない。召喚者の一佐からしても、彼の存在は異質であった。

「ああ……そうだったな。『司令官』」コマンドー

ぼつりとつぶやいた一佐の視界に、有無を言わず男のステータスが映り込む。

幸運が他よりも若干高いのみでまだまだ低い。日本で最もいいほどの有名な英雄でもこれか。肩を落とした一佐にかまうことなく、コマンドーと呼ばれたサーヴァントは口を開いた。

「アサシン、ライダー、今回明らかになつたキャスター。それにその君……イノマタ軍曹のバーサーカーと、エンジニア。それとあとコマンドーである私を含めて、君たちには全部で6騎が明らかとなっている。……それに、三騎士は何があらうとも変更されることがないという事例を当てはめてみたまえ」

皆まで言わせるなよ。コマンドーは興味が尽きたように顔をそむけると、長机の上から一本のコーンパイプを手に取ると、ふうと紫煙を吐き出した。

「まあ、なんで『技術者』エンジニアと私が召喚されているのか。だの、各々のマスター、サーヴァントの特性は何なのか。だのなんだのという些事は参謀に任せる」

白い将官用の軍服を着流したコマンドーは、一佐の肩をぽんとひとつ叩いて、用は終わりとばかりに背を向けた。

ほりの深い西洋人の顔立ちに黒いサングラスをかけたその印象的な姿。銜えたコーンパイプからくゆらせられたその煙には、生粋の日本人である猪又二曹といえどもどこ

か憧憬の念すら抱きそうになって――

「コマンダー。あまり日本の将兵を魅了しないでいただきたい」

おお、悪いな。コマンダーは悪びれもなくひらひらと手を振り、すうつと煙に消えるように霊体化していく。

そのとたんに二曹の脳髓から夢を見ているような心地のよさが消滅し、一佐の皺だらけの眼窩の奥から覗く細く冷たい視線だけが残った。

「……………二曹。君はもう少し、魔術師としての心構えを持ったほうがいいぞ」

一佐に呆れたようにたしなめられる。二曹は申し訳ないと頭を下げる。実際、欧米の高名な魔術師から株分けしてもらって70年もたっていない弱小の魔術師なのだから、しようがない。

――丁度その時だ。

その多大な魔力消費を理由に霊体化していたはずのバーサーカーから、激痛を伴うほど強烈な魔力供給を要されたのは。

Under heavy fire—01

それは、まさに青天の霹靂だった。

キヤスターと、エンジニアを名乗るサーヴァントの一騎打ち。細い路地を舞台にして行われた激闘を、誰も邪魔する者はいないと矢先の出来事。どこからともなく、いや黒く塞ぎ込むような空から落ちてくるようにして参上した第三者が、何もかもをもめちやくちやにした。

丁度一瞬前まで、スパナとナイフの応酬が繰り広げられていた殺陣が、たった一度の闖入者により崩壊する。

雷鳴の如く現れたそのサーヴァントに、ヴェスパは目を奪われた。

「嗚呼、嗚呼嗚呼嗚呼……………」

怨恨とも歓喜ともつかぬ、歪みきつたしやがれ声。

その身体からはどす黒い血のような色の霧を、靄を放出し続けており、その正体は依然として判らない。

その手には、同じく漆黒に染まりきつた背の丈ほどもある小銃。時折薄くなる霧から覗くボロボロにすり切れた袖は、まるで悪鬼羅刹かそれに追い回される亡者のような印

違う。あいつは、『キャスターを見ただけ』だ。

直接蛇に睨まれたわけでもないのに、その不気味極まりない動作に、声色に、思わずぺたりとへたり込みそうなほどの威圧を感じてしまう。

「嗚呼——中将、閣下。不格好ナ敬礼ニツキ、失失失礼礼レエエイシ、マス——」

バーサーカーはそんなヴェスパの様子などつゆ知らず、ぎこちない動作で真つ黒く染まりきった小銃を腰の高さまで持ち上げると、靄だか霧だかによつて判然としない左手を銃の中央部に添える。

そのまま腕の力だけで軽々と、しかしゆらりと不敵な気味の悪さを孕んだまま上に引き上げて体の中央で構え、右手で銃の下部を持つ——あたかも君主に宣誓を捧げる騎士のように、真つ直ぐ構えた銃の筒口を空へと向けた。

「……何を、している？」

「判らん………吾輩を、友軍、それか上官とみている。のか？」

エンジンアを背にするように、キャスターを正面とするように直立して銃を空へと構え続ける様子を見て、キャスターは小さく答えた。

「嗚呼、中将閣下。小官ハ貴隊ノ指揮、シキシキ、指揮下へ……シキ指揮指揮指揮指揮指揮指揮指揮指揮危機危機危機キキギギギギ——」

「あわー!？」

その声に反応したのか、咆哮の後に小銃をだらりと下げてしばし虚空を見つめていたバーサーカーに動きがあつた。

「比島……人。小官、ハ、護国ノノノノオニシテ八紘一字ノ具具具具現現現現現。嗚呼、周りハミナ敵、敵敵敵敵敵敵敵、嗚呼將ニ我ガ世ニ現出セル地獄ウツ!

南洋ノ孤島ニオイテ小官ハ、小官ハ、小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハアアアアアアア——ツ!

突然に何事かをぶつぶつと呟いて、最後には頭を抱えて天を仰ぐ。

黒い霧に覆われた人影から、1つ真つ黒に染まりきつた闇が一粒こぼれ落ちて、消えていく。

ふらり。嘆き終えたように虚空を睨んで起立していたバーサーカーの腕が、脚が、糸に操られたかのように——独りでに動いた。

重厚な魔力の風が、黒い霧と一緒に小銃へと集まっていき——その先端に、どす黒く尖つた銃剣を作り出す。

「敵視ニイイイイン、比島ゲエリラララララ………」

キャスターは、そのとき悟つた。

狂気を孕んだ赤い双眸の向こう側にいるのが、他ならぬ未熟者な少年、ヴェスパであ

Under heavy fire—02

「大変ね」

「ああ、大変だな」

春野市の丁度中心部——春野市市役所の庁舎、その屋上に2つの人影が、嫌に明るい月に照らされていた。

どこか超然的な、憐憫すら混ざり合ったその視線の先には、春野市一の不夜城。灯りの落ちない街と名高い小倉通りがある。

その歓楽街の一角——不自然なほどに暗く、人気のなくなった路地裏に、人知を越えた英霊達が集っていることを、街行く酔漢たちは誰も気付かない。

「あの人避けは……エンジンアのマスターかしら？」

「……上官殿は、この伍長風情にどんな戦略性を望んでいるのやら」

白い軍服の男は飄々と肩をすくめ、女もまた話を変える。

「キャスターにバーサーカー、それとエンジンア……服装を見るに誰も彼も第二次世界大戦の人物とは、まさに英雄の大陳列展ね。そうは思わない？ アサシン」

自殺を防止する為。その成果が現れたのか、設置されてから錆が浮くまで風雨にさら

されてきた金網がガシャリと鳴く。金網に寄りかかった女、エイナは目の前の男に尋ねた。

男は、アサシンは月明かりを受けて白く耀くフードの奥から冷たい目を覗かせ、ぼつりと独り言つ。

「ふん……下らんな、実に下らんない」

何？ エイナは向き直ると、じつとアサシンの双眸を見据える。

彼らはマスターとサーヴァントと呼ばれる主従にもかかわらず、アサシンは不遜な口調でその理由を述べた。

「俺にかかれば、奴らなど早々に射殺できる。と言うことだ」

「あら、大層な言い草ね。最強アサの狙撃兵シン」

茶化すようにした言葉尻をアサシンは静かに受け止めて、続ける。

その手にした木製の銃床の重みを感じつつ。ぼつぼつと言霊を織り込むように。

「戦場において、恐るべきは狙撃兵のみ——だが、敵兵の雰囲気はしない。つまるところ、この俺の独壇場と言うことだ」

試しに一人、撃ち殺してやろうか？

月夜に狙撃兵は一人、ほくそ笑んだ。

「■■■■■■■■■■——ッ!!」

重厚にして濃密なノイズの奔流が、キヤスターを。そしてヴェスパを抑え、締め上げる。

息苦しさすら感じられるほどの威圧。こいつに歯向かったら死ぬな。という、どこからともなくわいた直感。魔術師たるもの、死をいつだって覚悟しているつもりだった。

だけどまさか——その脅威そのものが、こちらへと稲妻よりも早く突っ込んでくるとは。少年はほんの一瞬たりとも、思わなかった。

銃剣が迫る。真っ直ぐに、純粋な殺意と技量のみを持つて命を刈り取りに来る。

令呪を使う暇も、魔術を行使する暇も、逃げる隙間ですらなにもない。

「止めろ——っ!」

キヤスターが動く。

地面をできる限りの膂力で蹴りつけ、黒く不気味に光る銃剣の、その凶悪な切っ先の前に立ちふさがるように割って入った。

「ぐっ……………」

刹那、鈍く冷たい衝撃。脇腹からせり上がってきた血液が、この傷の深さを表している。キヤスターにはそんな気がした。

「……………嗚呼嗚呼、中将閣下。如何サレマアシシシタ?」

自身の犯した行動を直視していないのか、黒い靄の向こう側から爛々と輝く灼眼が不思議そうな声色と共に投げかけられた。

キャスターは、じわりと滲む血液に軍服の袖を汚しながら小銃の銃身を引つ摺むと、ゆつくりと肉体から引き抜いていく。

「……………吾輩は、君のことを知らない。だが一つだけ、たった一つだけ判ったことがある」

吐き捨てた呼気と共に、濃い血液が咽を陵辱する。

激痛と鉄の味が舌を震わせ、言葉にならない荒い息を幾度か溢した後、口を開いた。

「君は、吾輩の敵であり——吾輩は君の敵だ」

キャスターは告げる。銃剣を脇腹に突き刺したまま硬直した亡霊を見据え、その身体を思い切り蹴り飛ばした。

「敵——嗚於、中將閣下アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ナンタルコトダ、米兵ニ絆サレマアシシシタカ。嗚呼恨ムベキハ鬼畜米英、我々大日本帝国ノ軍人ヲ無力化セシムガ為ニコウモ悪辣ニシテ非情ナルナルナルナルルルルルツツツ!」

否定。

キャスターの軍靴によって押し飛ばされ、その場にたたらを踏んだ後、壊れた機械の

ように怨嗟を吐き出し続け、英霊は絶叫する。

びりびりと蠕動するガラス片に、空気に、その人智を並外れた膂力を推し量ることが出来た。

「嗚於結構！ 小官ハ独り、山中ニテ自活セン！ タトイ中将閣下ノ指揮ノ下ニナクトモ、小官ハ、小官ハ、小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ小官ハ——
生キネバ、ナラナイ」

ゾツとするほどの低く、無感情な声がバーサーカーの咽喉から発される。

そのまま流れるような動作で懐から銃剣を引き抜くと、それを真つ直ぐに構えてキャスターへと疾駆する。

その切つ先の正面にあるのは、飾緒も勲章もない、黒い無地の将校用礼装。その左胸

凶刃がキャスターの心臓へと届く刹那、どこからともなく声が響いたのを、ヴェスパは聞き届けた。

『止まれ、バーサーカー』

己の黒い軍服をべたべたと触れて、腹以外の傷の有無を確認しているキャスターをふんと鼻で笑って、声の主は月明かりの下に姿を現した。

「私はコマンダー。諸君らのなかには——顔見知りはいないか。まあ、ただのコマンダーと呼び給え」

「……コマン、ダー？」

ああ。ヴェスパの問いかけに小さく唇を開けて微笑んだコマンダーは、その右手に赤黒く輝く二画の刺青のような文様を覆い隠すように白い手袋を嵌める。

表情を多い隠すかのような真つ黒いサングラスと大きなコーンパイプの特徴的なサーヴァント、コマンダーは色のあせた夏用の軍服を着込んで、冷たい夜闇の中に屹立する。

「やあコマンダー。君は僕を知らないようだが、僕は君を知っているよ。あれは確か——シュトウツトガルトでのことだったか」

「別人ではないかな。君のようなマッドサイエンティストに心当たりは、一人くらいしかない」

マッドサイエンティストとはひどい言い草だな。どこからか持ってきたと思しき錆びた鉄板の陰に隠れながらスパナを持った白衣の青年、エンジンアはせせら笑い、そのスパナを血にまみれたキャスターへと、ひいてはそのマスターであるヴェスパへと向け

た。

「お前ら……司令官コマンドーと技術者のサーヴァント……だつて？」

聖杯戦争と呼ばれる儀式は、基本的には7騎のサーヴァントからしか成り立たないはず。腹立たしいほどに素晴らしい講師、ロード・エルメロイⅡ世からの受け売りにはなるが、基本的な情報は仕入れてきたと自負するヴェスパは、その記憶のページをめくる

対魔力に優れたバランスの良い『剣士セイバー』

白兵戦闘に秀でた『槍兵ランサー』

遠距離からの狙撃に特化した『弓兵アーチャー』

この3クラスを基本にして絶対に不可侵な領域と定められ、どんな変則的なルールになろうともこの3クラスが変動したことはないのだという。

次いで、変動する可能性のある4クラス。

狂気を孕んだ暴走兵器『狂戦士バーサーカー』

高い機動力で敵を攪乱する『騎兵ライダー』

マスターに対して必殺の刃を振るう『暗殺者アサシン』

そして、陣地工作の先駆者。『魔術師キャスター』だ。

極東のある都市において行われたとある聖杯戦争では、ライダーの代わりに

『撃墜王ガンナー』というクラスが追加されたこともあったとか。しかし、今回の聖杯戦争では、

そのような兆候が見られない。

すると、表れるのは7体のサーヴァントたちにプラスして『司令官』、『技術者』という特性の未知数なサーヴァントを追加された、9体の英霊達によるバトルロワイヤル。この構図のみだ。

「……………お前たちは、一体何なんだ？」

唾を嚥下して口に出した質問を、コマンドーは一瞥くれてやったのみで素っ気なく答える。

「さてね。私はこの戦争の駒に過ぎず、それ以外の何物でもないのな。……………まあ強いて言えば、私とこの彼、コマンドーとエンジニアはさしずめ、『聖杯戦争を戦争らしく足らしめるため』の、ピースに過ぎないということかな。

詳しくは各々の参謀殿マスタと協議でもし給え」

まあ、私の知った話ではないがね。コーンパイプを外して、ふうと一服。冷えた空気に乗って消えていく紫煙は、どこか儂げに見えた。

コマンドーはそのままおもむろに視線を外すと、銃剣をキャスターの胸腔に今にも突き刺さんとする状態でびたりと静止したバーサーカーに視線を送る。

果たしてそこには——怒りに体中を震わせ、絶叫する英霊の姿があった。

「米兵——鬼畜、鬼畜米英イイイイイイイイ!!」

☒赦サレザル、赦サレザル、赦サレルベキニ非

ズツツ!! 一度ナラズ二度マデモ、貴様ヲハ何時モ何時モ、悪逆非道ニシテ辣悪無比極マル方式ヲモツテシテ戦争目的ヲ果タサントス——ツ!」

「喧しい男だ。日本の兵とはみんなこうなのかね?」

そういうしながらちらりとキヤスターの方を見、再び視線を外す。

まあ、知ったところでどうにもならんがね。それきり興味を失ったのか、コマンダーはパイプを改めて口にくわえて、その黒眼鏡サングラスに隠された眼をもつてじつ——とキヤスターを凝視した。

「——何だ。吾輩に何の用だ」

いや何も。コマンダーは肩をすくめると、右手を虚空に向かつて振るう。すると今にも暴れださんとしていたバーサーカーへの不可視の拘束が外れ、あつけにとられたかのように呆然と夜空の向こう側を眺める黒い人型の霧だけが残った。

そんなバーサーカーは静かに、陽炎のように揺らめいて消えていった。霊体化して脱出を試みられたのだろうか、まるで元から何も存在しなかったかのように、平然と亡霊のように消えていく。

その姿をふむとうち領いて見届けたコマンダーはコーンパイプの位置を直すと、大仰な仕草でまるで翼でも広げるかのように腕を広げる。

「それでは諸君ら。今宵の戦はここまでとしようではないか、バーサーカーもそこな

キャスターも、エンジニアといえどもこれ以上の戦闘行動は控えたいのではないかね？」

—それとも何か。継戦をお望みか。

サングラスの向こうからちらりと覗き見えた鷹の目のような視線には何も言えず、ヴェスパとキャスターは彼が霊体化して消えていく光景を呆然と見るのみだった。

Incoming

「上官殿^{マスター}。バーサーカー、エンジニア及びコマンダーが撤退するようだ」

「キャスターは？」

「マスター共々、一時待機……応急処置か」

「どうする？」 照星の向こう側にまだ年若い少年の頭蓋を捉えたまま、アサシンは尋ねる。

静かに、ただただ感情を押し殺した平坦な声を以て。

ふうん。エイナはうすらとほくそ笑むと、男に尋ねかける。

「やれるの？」

「ああ、素面じゃなくたって外すことはない」

証拠とばかりにふいと銃口を跳ね上げ、またびたりと同じ位置に戻した。

その気になれば指を少し動かすのみでその命を奪える位置に、彼は立つ。自分から狙点をずらし、調整を加えた上ですぐにまた狙いを付ける。

銃口の向こう側の少年はほんの500m先の暗闇から覗かれていることに気付きもしない。容易いな。アサシンは一つ鼻で笑う。

まるで命をもてあそぶかのような行動に眉をしかめて、エイナは告げた。——撃てと

あいよ、マスター。小さく返した瞬間、アサシンの纏う空気が一変する。ぴりぴりと震動する大気の中、ふっ。アサシンの肺胞から放たれた短くも太い呼気。それきり撃つ側も撃たれる側も微動だにせず、ただ一陣びゅうと風が啼いた。

「……じゃあな、キャスターの少年」

アサシンは静かに胸を膨らませ、たったの一息で引き金を引く。

霜を落とすように。一切のぶれもズレもなく引き絞られたトリガーが働き、夜闇を切り裂くような銃声とほぼ同時に鉛の弾丸が飛翔した。

獲った。

にまりとアサシンは口角を上げ、勝利を確信する。

このまま数秒後、

——と、次の瞬間。

銃弾が爆ぜた

「……………っ、伏せろマスターー！」

一瞬の不審にわれを奪われながらも、アサシンは叫んだ。

サーヴァントの、しかも気配遮断スキルを有するアサシンの狙撃を妨害した何者か

が、「この狙撃地点に気づいた」——なぜだかそういう確信が持てた。

え？ きよとんと立ち尽くすエイナの銀髪を散らすようにして、何かが通り過ぎていく。

それは彼女の背後、コンクリートで作られた建屋に突き刺さった。

白銀の月光に照らされたその金属製の鏃。あたかも光線か何かのように放たれたその物体の形。

そして、サーヴァント随一の視力を有するクラス。それは。

「アーチャーか」

「アーチャー、なんでっ!？」

エイナの小さな悲鳴を聞きながら、アサシンは小銃を抱えて周りのビル街を見回す。

どこだ、どこだ。見つけろ、敵の狙撃手を見つけねば——

ドクリと心臓が大きく高鳴る。醜く変形した下あごがじくりと痛んだ。

見つかからない闇にちっと舌打ちして、銃を両手で抱きかかえる。マスターのほうをいったん振り返り、ひとつアイコンタクトを行った。

こくり。エイナは力強く頷いて、右手に描かれた赤い血のような令呪にそっと指を這わせる。

瞬間、魔力が収縮した。ビルを通り過ぎる強風が巻き込まれるようにして、ぞつと底

冷えるような冷気が流れ出ていく。狙撃銃を包み込むようにつむじ風が舞う。それ自体が特大の異常性と変異していく。

これを使えば、マスターを逃がすくらいはできる。アサシンはごくりとのど仏を上下させて息を吸った。

「宝具——」

「駄目！」

「何?！」

突然の指示にあっけにとられ、アサシンは後ろを。マスターたるエイナのもとを振り向く。

「……もう遅いわ」

まず目に映ったのは、すべてを諦めたかのようなエイナの顔。

銀色の長い髪が不自然に肩の辺りで切り離され、パラと夜風にさらわれて飛んでいく。

そして——細い首筋にあてがわれた白銀の長剣。

「誰だ、貴様は」

アサシンは殺意だけを声にこめ、ぽつりと問う。

すると闇が実体を纏うかのように、魔力がうごめく。

「さすがだな、狙撃兵」

出てきたのは筋肉質な腕。剣を握り締めた右腕と左腕の二つのかいなが、エイナの後ろの闇から生えているようだ。

茶色い士官服に包まれているとはいえ目に見えるそれはまるで丸太のように太く、強く。ただそれだけでも細い首をへし折れそうなくらいに。

ひとつ舌打ち。それは接近に気づけなかつた自分自身へのものか。

狙撃を諦めたアサシンの小銃がエイナを、そしてその後ろにうごめく魔力の塊をむけて指し示された。

おお、こわいこわい。闇はせせらわらつて、何も持っていない左腕であたかも前髪を整えるかのように闇にかざされる。

「ようアサシン。いつぶりだ?」

闇は一人の男の形をとって、実体となった。

茶色い砂漠用の士官服に身を包んだその男は、あたかも旧友であるかのようにアサシンへ笑いかける。

「……貴様みたいな時代錯誤野郎と会ったことはないが」

それもそうか。がははと豪放に笑い飛ばし、男はエイナの首にあてがった剣を握りなおした。

月光を跳ね返してちかりと煌めく銀の刃は、中世の騎士が握るものと同じもので。

その時代錯誤じみた騎士剣と弓が、近代的な黄土色がかつた士官服とのコントラストとなつて絶妙な違和感をかもし出す。

「俺はジャック。ただの名無しさんだ」

ジャックと名乗つた男は、エイナの首から長剣を離すとその切っ先をアサシンに向けた。

「——さあ、殺しあおうぜ。そのための戦争だ」